

20世紀の始まり（1901～1915）、その1

《臨時治水調査会》

20世紀最初の1901年（明治34）は、ノーベル賞が創設された年でもあります。1903年にはライト兄弟が初飛行を成功させています。20世紀初頭は、さまざまな分野において革新が胎動し、相互に影響し合いながら、現代に直結する歴史を刻みます。

まずは、治水の話です。

1903年（明治36）、パナマ運河工事に従事すべく、東京帝国大学土木工学科を卒業したばかりの青山士（あきら：注1）が渡米します。

1905年（明治38）に日露戦争は終結しましたが、今度は、大水害が、1907年（明治40）、1910年（明治43）と立て続けに東日本を襲います。（注2）

とりわけ、明治43年水害は、西日本中心に発生した明治29年水害を上回る被害でした。特に利根川、荒川は壊滅的な被害を受け、日韓併合に向けた重要な時期に、桂太郎総理大臣が軽井沢の別荘で閉じ込められ、官邸と連絡がつかない不測の事態となりました。

官邸への帰途上、被害状況に危機を感じた総理は、秘書官に命じ、治山治水対策の原案を作らせ、内務省に持ち込ませます。こうして、内務大臣をトップとした「臨時治水調査会」（関係各省代表、両院の議員計20名）が発足します。

ここで、多摩川を含む65河川を対象に治水長期計画が策定されることとなり、第1期施行河川が15に決められます。具体的なプロジェクトとして、荒川放水路計画が原田貞助によって計画され、翌1911年（明治44）に事業着手されます。そして、パナマ運河工事に従事していた青山が帰国して内務省に迎えられ、荒川放水路工事を指導監督します。（注3）

多摩川は、明治40、43年と被害を受けた（注4）にもかかわらず、第1期施行河川とはなりません。そして、この決定に反発した地域住民によって、多摩川流域は、次の時代に向けて大きく展開し、変革していくこととなります。

注1：青山士（生没年：1878－1963）は、7年半に渡り、パナマ運河工事に従事。80%近く完成した段階で帰国。荒川放水路を完成させたあと、難工事続きだった信濃川の大河津分水も完成させています。

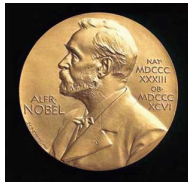
注2：利根川の治水工事は、淀川改良工事を立案した沖野忠雄が、内務省土木局長になって計画を指導し、1900年（明治33）策定。明治43年洪水は、計画を上回る洪水であったため、明治33年の治水計画が見直され、堤防高を1.8m高くする方式を採用しています。また、足尾鉍毒事件を解決する渡良瀬遊水地計画も、このときに計画されたものです。

注3：荒川放水路は、川口までの隅田川の水運を助け、上流からの洪水を流す目的で計画され、延長22km、川幅500m、移転家屋数1300戸の大規模プロジェクトです。淀川放水路が竣工した翌年に着手され、19年後の昭和5年に竣工。荒川放水路計画は、淀川竣工を念頭に、次のプロジェクトとして、用意周到に準備されたと推察しますが、その様子は未解明です。また当時最新の機械土工により掘削・浚渫されたことは記録されていますが、その土の捨て場や築堤材料の入手などが与えた社会的影響や評価については研究が待たれます。

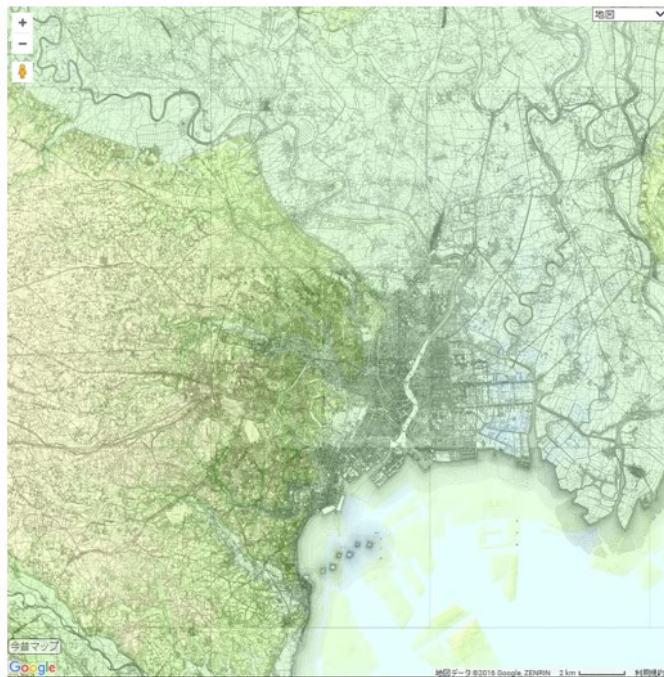
注4：多摩川は、明治40水害では、破堤20箇所、明治43年水害では、全川に渡って破堤という悲惨な状況に陥っています。

写真は、①ノーベル賞（野依教授受賞のメダルの表：名古屋大学HPより）、②荒川放水路地図（今昔マップより細見が加筆）、③旧岩淵水門（放水路の起点部分に設置された水門、細見撮影）

①



②



明治4 2測図

昭和6年発行



荒川掘削浚渫土の行き先は？

③

